

第三十七回 『城戸賞』 応募作品

ねてもさめても

松本夏緒里

うに描く姿を見て、自分も絵を描き続けたい
と強く思い立ち再び筆を取る。「ただ生きて
名を成して北齋を継ぐ事より」「ただ生きて
絵を描く」とえ永遠に北齋の影であつても。
迫 お栄に新作を見せられた大黒は、その絵の
力に圧倒される。「これはお主が描いたのか？」
「いいえ。私は北齋の娘。ただの手伝いにご
ざいます」
お栄は決意を秘めた目で大黒を見据えた。
(終)

【登場人物】※（ ）内の年齢は現代に置き換えたイメージです。

- お 栄 (33) 浮世絵師 (葛飾應為^{おうい}為應)
- 鉄 蔵 (63) 浮世絵師 (葛飾北斎) お栄の父
- 登与助 (34) 出島絵師 (川原慶賀^{けいが}慶賀)
- 溪斎英泉 (34) 浮世絵師 (本名・池田善次郎)
- 大黒勘兵衛 (50) 勘定奉行
- 門倉菊乃 (36) 浮世絵師 (白梅亭菊為)
- 門倉清衛門 (31) 菊乃の弟・大黒の部下
- 重四郎 (20) お栄の甥
- 葛屋重三郎 (45) 版元、絵草子屋
- 永楽屋 (35) 版元、絵草子屋
- お 雪 (19) 女郎
- おみつ (38) 長屋の女
- 馬場為八郎 (32) 通詞
- 門倉喜代 (26) 清衛門の妻
- 儀 助 (48) 門倉家の雇い人
- シーボルト (37) 蘭人・医師
- 大黒久枝 (45) 大黒の勘兵衛の妻・歌人
- 絵草子屋
- 古着屋の女
- 同心①②

○色鮮やかな枕絵

さらさらと絵筆が紙の上をすべり、仄かな蠟燭の灯りに照らされる。着物をはだけた男女が妖しく絡み合っている姿が描きあがっていく。筆を走らせる白い華奢な手。薄暗い部屋、床に広げた紙に突っ伏し、筆を走らせているのはお栄（33）である。

挑むような強い眼差しで息を殺し絵に向う。額に汗が滲み頬を伝って流れるが気にもせずひたすら筆を走らせる。

○タイトル「ねてもさめても」

○裏長屋・外

井戸端でおみつ（38）が野菜を洗っている。隣でおみつと談笑しながら、胡瓜をぼりぼり齧っている鉄蔵（63）。

○北斎の家・中

筆を手にしたまま仰向けに転がっているお栄。着物のお栄の裾が乱れ軽くいびきをかいている。部屋の中は書き損じ丸めた紙屑が散らかり、現代でいうところの「片付けられない人」の部の屋敷の笑い声に、目を開ける鉄蔵とおみつ。

○裏長屋・外

お栄「朝か：：」
「お栄、顔を出す。悪い長屋の戸が開き、お栄が顔をす。眼は半開き髪も乱れている。」

おみつ「（呆れて）とつくに昼だよ」

お栄「あら、そう……」

鉄蔵「いい絵が描き上がったな」

お栄「うん……」
と、ダルそうに井戸端に来てバシヤバシヤと顔を洗い出す。
鉄蔵「じゃ、おんな北斎の絵にじじいが落款を入れさせてもらうかな」

おみつ「なに言ってるんだい。北斎はあんただろ？」
鉄蔵「へへへ」と笑って家の中に入っ

て行く。
おみつ「女が枕絵ねえ……」
と、お栄を見る。

おみつ「無視して髪をすいているお栄。おかしな世の中になったもんだよ」
野菜を手に行く。

お栄「今度、おみつさんも描いてやろうか？」
と、ニヤリとおみつを見る。

おみつ「まつ、人をからかって」
「へへへ」と笑うお栄。
真つ赤になつて去って行くおみつ。
ふつと笑つて髪を手早くまとめるお栄。

○北斎の家・中

描き上がった枕絵に「葛飾北斎」の署名と落款を入れている鉄蔵。

お栄が戻つて来る。
落款を入れた絵をじつと見つめる鉄蔵。

鉄蔵「うめえな」

お栄「もう、枕絵じゃ、おめえに勝てねえ」

鉄蔵「よく言うよ。描きたくないだけだろ」
「へへ」と含み笑う鉄蔵。
「この年になると、男と女の睦み事なんどいでもいんだよ」

鉄蔵「関心なさを描くぞ」
「俺は富士を描くぞ」
と、ゴミをどかして紙を広げる。

お栄「それじゃ、アタシはこれを版元に持つて行くよ」
鉄蔵「ああ」
と、筆を走らせる。

○江戸の町

人々が慌しく行き交う中、風呂敷包みを手にお栄が歩いて行く。風呂敷包み数人の女を連れて歩いて来る派手な着物を着流した溪斎英泉（34）。

お栄「あ……」

お栄「お栄を見つけたウインクして見せ、すれ違つて行く英泉。唇が「あとでな」と動く。

お栄「いいよ、早く来るな」
と、足早に歩き出す。

○蔦屋の店・外

店頭の色鮮やかな役者絵、美人絵、力士絵に人々が群がっている。番頭「艶っぽい美人絵を掲げて見せる番頭。番頭「この美人絵は、江戸で一番の色男、溪斎英泉の新作だよ！」

お栄「お栄が来てその様子を見ている。お栄「お栄が来てその様子を見ている。溜息をつき、店に入っていく。」

○同・中・座敷

蔦屋重三郎（45）がお栄の枕絵を見て

いる。そばで英泉の美人絵を見ているお栄。お栄「（小声で）なんで、この絵が人気があるのかね……」

蔦屋「英泉人気はうなぎのぼりですよ。よく売れて助かります」

お栄「こんなコワイ顔の女なのねえ」
 と、不思議そうに絵を見る。
 お栄「絵の女とお栄の顔を見比べる。蔦屋。」
 と、不意にお栄に顔を向けられドキリ
 お栄「？」
 蔦屋「蔦屋、曖昧に笑って見せる。
 蔦屋「実は、錦絵に理解のあるお武家様が
 おま：てね」
 お栄「有名ではないが才覚のある絵師を大々
 蔦屋「ウチの店から売り出してはどうかと仰
 つているのです」
 お栄「ふーん」
 蔦屋「勿論、ご禁制の物もありますからね。
 表だつてではなく、言葉通り『後ろ盾』と
 おし：お力を貸し下さるそうですよ」
 蔦屋「奇特なお方もいるもんだね」
 お栄「飾應為殿を推したいたと思つているのです」
 蔦屋「いかでしよう？そろそろ、北斎から
 一人立ちしてみては」
 お栄「で、いい話じゃねえの。やれよ」
 英泉「廊下から姿を現わす英泉。
 お栄「来んなつて言ったのに」
 蔦屋「今、英泉さんの絵を見て頂いていたと
 ころです」
 英泉「そうかい」
 と、派手な着物をヒラヒラさせながら、
 英泉「お栄の隣にどかっとな腰を下ろす。
 蔦屋「はい、それを見ればもう」
 蔦屋「お栄は、お栄さん一人立ちか。蔦
 お栄「早速ですが、これからお屋敷にご一緒
 願えませんか」

お栄「え、これから？」
大黒「ええ、善は急げと申しますから」

○大黒勘兵衛の屋敷・外観
立派な武家屋敷。
大きな門に「大黒」の表札。

○同・中・座敷

大黒勘兵衛（50）に数枚の美人絵や枕
絵を見せている大黒屋。
側で控えている門倉清衛門（31）。

大黒「いかがです？素晴らしい出来でござい
ます」

大黒「うむ……」
大黒「葛飾應為殿は北斎の正当な後継者でござい
ます」

大黒「うーん、大したものだ」

大黒「感心したように絵を見る大黒。
が、ここ最近の美人絵、枕絵はほとんど應
為殿が描いておられます」

大黒「ほお」

大黒「手伝いというより、既に應為殿も北斎
だと、版元の私どもは認めております」

大黒「なるほど、二人の北斎、か。面白い」

大黒「では、通せ」

清衛門「はい」

大黒「上機嫌の大黒の前に座り頭を下げてい
るお栄と英泉。
大黒「よいよい、頭を上げよ」

大黒「（英泉に）ほお、男前ではないか。おな
ご受けしそうだな」

英泉「？」

大黒「大黒様、こちらは溪斎英泉と申しまし

大黒「英泉？枕絵のあの淫乱齋か？」
 英泉「ハハハ、よくご存知で」
 大黒「と、にやにやと大黒を見る。」
 大黒「お栄を見つめる大黒。」
 お栄「私でございます。」
 大黒「お主が……」
 お栄「はい。」
 大黒「お主、なのか？これらを描いたのは」
 お栄「はい。」
 葛屋「大黒様、葛飾應為殿は北齋先生の三番
 目のご息女でございます。」
 大黒「……」
 大黒「表情が曇る大黒。じっと絵を見つめる。」
 大黒「女にしとくのはちと惜しいな」
 大黒「手にした絵を真つ二つに破る大黒。」
 葛屋「大黒さま、何を！」
 英泉「と、絵を拾い上げる。」
 英泉「と、立ち上がる」とする英泉を制止す
 るお栄。
 大黒「女の絵師などけしからん」
 お栄「……」
 大黒「女の役割とはなんだ？」
 お栄「……さあ？」
 大黒「主人を助け、子を産み育て家を守るこ
 とではないのか」
 お栄「あいにく、私には主人も子もいません
 でしてね」
 大黒「（呆れて）嫁にも行かず、ずっと枕絵な
 どを描いているのか？」
 お栄「嫁には行きましたが、離縁されました」
 大黒「離縁された？なぜだ？」
 お栄「禁じられていた絵をこっそり描いてい
 たのを見つかって、追い出されましてね」
 大黒「それだけの理由でか？」
 お栄「さあ？私の方が上手いのが、よっぽど

つて、申し訳ない」
お栄「いえ、二代目のせいでありますよ。
英泉「随分と頭のかてえお武家様だな」
葛屋「大黒様には正直がっかり致しました。
お栄「お栄さんの絵が解らぬとは」
お栄「……」
足早に屋敷から離れる三人。

○北斎の家・外（夕）

お栄と英泉が帰って来る。

中から重四郎（20）が出て来る。

重四郎「（家の中に）じいちゃん、またな」

お栄「重四郎！」

重四郎「あ、お、叔母ちゃん」

と、逃げようとするがお栄に襟首を掴まえられる。

お栄「つたく、また、ジジイにたかったね？」

重四郎「見逃してよ、真面目に商いやるから」

さ

お栄「商い？あんたがかい」

重四郎「（英泉に）女郎屋やるから、来て下さ

いよ」

英泉「あんまり、お栄さんに心配さすんじゃ

ねえよ」

重四郎「今度は大丈夫ですよ」

お栄「へんな商いするより、一緒に住んでく

れたら助かるだけだね。あんたにも絵描

きの血が流れてんだよ」

重四郎「……俺は、絵描きは嫌えなんだよ」

お栄「……そうかい」

と、去って行く。

溜息をつき見送るお栄。

○同・中（夕）

お栄「お栄と英泉が入って来る。

お栄「親父殿、重四郎に金をやったね？」

「ゴミの奥から顔を出す鉄蔵。」

鉄蔵 「仕方ねえだろ……」

お栄 「ったく、孫にあまいんだから」

英泉 「先生、邪魔しますよ」

鉄蔵 「おお、善次郎。久しぶりだな」

鉄蔵 「（英泉に）アゴ、機嫌悪いな」

英泉 「ちよつと色々ありましてね」

鉄蔵 「蔦屋の話、上手くいかなかったのか？」

お栄 「なんだよ、知ってたのかい？」

鉄蔵 「俺が蔦屋に頼んだのよ。そろそろアゴ

お栄 「一人立ちを考えねえとって」

鉄蔵 「余計なことを」

お栄 「何言ってるんだ！ 絵描きは一人立ちして

鉄蔵 「ナンボのもんだ。いつまでも俺の影じゃし

お栄 「……がねえだろうが」

鉄蔵 「……」

英泉 「『オーイ、アゴ』で、葛飾應為ってのが

鉄蔵 「先生らしくて粹ですぜ」

鉄蔵 「ハハハと笑う鉄蔵と英泉。」

お栄 「別にいいよ、一人立ちなんて」

鉄蔵 「よくねえよ。おめえは北斎を継ぐ身な

お栄 「んだぜ。その前に名を成さないと、無名の

お栄 「……北斎は継がせられねえよ」

お栄 「……紙を広げて枕絵を描き始める。」

○江戸の町

風呂敷包みを手にしたお栄が来る。少し険しい表情で足早に歩いて行く。

○絵草子屋・中

番頭 「困った様子を見せているお栄。」

番頭 「そりやね、北斎の絵ならアタシらも欲

お栄 「……だったら、お願いしますよ、旦那」

番頭「でもねえ、おかしな噂があつてねえ」
お栄「『ニセモノが描いてる』ってかい？」
番頭「あ、聞きました？」
お栄「そんなの嘘に決まってるんだろ。描いて
番頭のそりや、そうなんですか。そうだ、
親父さんの山の絵とか龍の絵があれば、喜
お栄「アタシの絵は貰うんだがね」
番頭「勘弁して下さいよ。御上に立てついたら
ませんか」と、両手を合わせる。

○同・外

お栄「風呂敷包みを手に出て来るお栄。
と、溜息をつく。何軒目だよ……」

英泉「派手な着物をヒラヒラさせ英泉が来る。」

お栄「……」

英泉「どうした、しけたツラして」
情けない表情で英泉を見るお栄。

○江戸の町

お栄と英泉が歩いている。

英泉「いよいよ大黒が動き出したってワケか」
お栄「アタシの絵だけ、買わないように版元
にお達しが出たらしいよ」

大きな溜息をつくお栄。

英泉「元氣出せよ。そのうちほとぼりも冷め
るって」

お栄「(厳しく)いつ？」

英泉「俺に当たるなよ」

お栄「そのうちって言ってる間に、親父とも
ども干からびちまうよ」

英泉「大袈裟な。御上が取り締まったって、
北斎だぜ。客が黙っちゃいけないよ」

お栄「(溜息) そうだといいいけどね」

お栄「あつゝ、落としたつもりだったんですけ
お栄「お自分の手首に触れる菊乃。
お菊乃「あなたも絵をお描きになるの？」
お菊乃「はい？」
お栄「会釈して行きかけるお栄。」
お栄「首の辺りが絵の具で汚れている。
お栄「じつとお栄を見つめる菊乃、お栄の手
お栄「そうですか？何だかお辛そうに見えま
お菊乃「え？いえ、そんなことございませんよ」
お菊乃「絵を描くの、楽しくないですか？」
お菊乃「恐れ入ります」
お菊乃「はつと顔を上げる菊乃。」
お栄「へえ、上手いもんだね」
お栄「通りすがりに菊乃の絵を覗く。
菊乃「風呂敷包みを手にお栄が来る。
菊乃「声――私は今も死んだように生きて
○回想・池のほとり
白梅の花を描いている菊乃、少し暗
い表情。私は今も死んだように生きて
菊乃「淋し頂かなくて遠くを見つめる菊乃。
お栄「溜息をつく二人。ごいす」
お栄「お家の一大事でございす」
お栄「描くのは無理でございす」
お栄「縮め付けたら、素姓を隠し
お菊乃「私も！折角、売れ出したのよ」
お菊乃「私、そろそろ潮時かもしれせん」
お栄「……」

と、お栄を見る。
お栄「正体が知れたら、お家の一大事なんだ
ってさ。お武家の女は大変だな」
英泉「……武家ってのは色々と面倒なんだよ」

英泉「じつと英泉を見つめるお栄。」

お栄「そーいや、あんたも武家だったなと思
ってさ」

英泉「昔、昔の話だよ」

着物をヒラヒラさせて歩いて行く英泉。
少し後ろを歩いて行くお栄。

○北斎の家・中

床の上に何枚も絵が並べられている。
景色や人々の暮らしを描いた風俗絵。
鉄蔵「床に突っ伏し仕上げているお栄と鉄蔵。
えぞ。絵も少し変えて描くんだ」

お栄「あー」
鉄蔵「お前の絵が売れない以上、この仕事
俺達の命綱だ、心して描け」

お栄「はいよ！」
鉄蔵「長崎屋から、こいつを受けといて良か
ったぜ」

お栄「親父殿、すまん」
鉄蔵「何言ってるやがる。これしきの御上の嫌
がらに負けてたまるか」

と、歯を食いしばり絵に向う。
苦笑して筆を動かすお栄。

○江戸の町・日本橋界限

○長崎屋・全景
西洋風の瀟洒な建物に「長崎屋」の大
きな看板。

○同・中・応接間
テーブルを挟んで睨み合っている鉄蔵
とシーボルト（37）。

の、景色や人々。言ってみれば記録係です」
 お栄「へーえ」
 登与助「出島では、美人絵や頼まれれば枕絵
 おも描きますよ」
 お栄「へーえ」
 登与助「珍しそうですね」
 登与助「あの：：良かったら絵を見てご指南
 頂けませんか？」
 お栄「アタシ？親父、呼んできましようか？」
 登与助「いえ、是非、あなたに」
 と、微笑む。

○同・中・登与助の部屋

登与助「座敷に広げた絵を見て並べている登与助。
 とは思いか、有名な葛飾北斎の片腕が女
 性と、嬉しそうに絵を並べる。
 曖昧に微笑んで一枚一枚絵をめくって
 いるお栄。
 さほど興味を引かれるでもなく流して
 見ているが、一枚の絵にはつとなり手
 を止める。」

お栄「：この絵」
 横「あ、覗き込む登与助。
 登与助「あ、覗き込む登与助。
 横「あ、覗き込む登与助。
 登与助「あ、覗き込む登与助。
 横「あ、覗き込む登与助。」

登与助「てらん夜の街の様子を描いた物。
 いられたような描き方になってい
 登与助「すこれがどうかし、か？」
 お栄「あ、江戸の絵師は、そのうが
 登与助「せん、で、たね。私も蘭人の絵描きに習
 お栄「た、ま、で、す、よ、か、ね、私、も、蘭、人、の、絵、描、き、に、習

登与助「そ、う、な、腕、じ、や、な、い、な、凄、い、絵、師、に
 恥、ず、か、し、よ、う、な、腕、じ、や、な、い、な、凄、い、絵、師、に
 登与助「そ、う、な、腕、じ、や、な、い、な、凄、い、絵、師、に
 恥、ず、か、し、よ、う、な、腕、じ、や、な、い、な、凄、い、絵、師、に
 登与助「そ、う、な、腕、じ、や、な、い、な、凄、い、絵、師、に
 恥、ず、か、し、よ、う、な、腕、じ、や、な、い、な、凄、い、絵、師、に

登与助 「と、ニヤリと笑う。

登与助 「お借りします」
と、言ったもののゴミだらけで場所が
なく途惑う。

登与助 「まずは、俺、掃除しましょうか？」
お栄 「いいよ。うっかり片すと師匠にぶっ飛

ばされるよ」
登与助 「ええっ！」

お栄 「ま、そのうち慣れるから」
登与助 「あ、ああ……」

その辺のゴミをどかし絵道具を広げ
「北斎漫画」を写し始める登与助。

床に突っ伏して絵を描き始めるお栄、
絵を写している登与助を見る。

お栄 「（小声で）本来の役目を忘れてるね」
お栄の事などすっかり忘れて様子で真

剣に絵を写している登与助。
お栄 「登与さん、そこじゃ描きづらいだろう

から、隣においでよ」
登与助 「いや、俺はここで……」

言いかけて、お栄がすごい形相で睨ん
でいる事に気づく。

お栄 「（無言の圧力）……」
登与助 「あ、いや、そっちに行こうかな」

絵の道具を手にお栄の隣に座る登与助。
お栄 「（小声で）頼みますよ、師匠」

登与助 「（小声で）ごめんごめん」
ちら、と奥の鉄蔵の様子を窺う二人。

黙々と絵を描いている鉄蔵。
袖から数枚の絵を取り出す登与助。

登与助 「（小声で）一応、手本になるような絵
を何枚か持って来ました」

絵を見るお栄、どれも光源のある絵ば
かり。

お栄 「わあ、キレイだな……」
登与助 「（小声で）まずはこれを写しなさい」

お栄 「（小声で）はい」
「フフ」と笑い合いそれぞれ絵を写し

始める二人。
ゴミの隙間から二人の様子を見ている

鉄蔵 「(ぼつりと)何やってんだか」
と、微笑ましげに見つめ、筆を動かす。

○江戸の町・俯瞰

○絵草子屋・外・店頭

職人風の男が二人、手代を相手に絵を
見ている。

通りかかるお栄。

男① 「旦那、北斎の新作はないのかい？」

手代 「お栄、思わず足を止める。」

手代 「ああ、北斎ねえ……」

手代 「あつ、それより、こちらはどうです？」

男① 「それもいいけどさ、北斎の描く女が一

番好きなんだよな」

手代 「さ、さようでございますか」

男② 「俺もだよ。艶っぽいけど品があつてよ」

男① 「そうそう」

男① 「じいっと手代を見ているお栄。」

男① 「思わず冷や汗を拭う手代。」

男② 「ないなら、仕方ねえか」

男① 「また、寄らせてもらうぜ」

手代 「は、はい。また、どうぞ」

手代 「と、ちらっとお栄を見ると得意げな表

情で手代を見ている。

手代 「！」

慌てて店の奥へと引っ込む手代。

談笑しながら去って行く男①②の後ろ

姿にそつと手を合わせるお栄。

○北斎の家・中

ゴミの隙間にお栄、鉄蔵、登与助がい

る。思案顔の鉄蔵を見ているお栄と登与助。

戸が勢いよく叩かれる。

お栄 「開いてるよ！」

と、英泉が入って来る。

英泉「入りますよ！」
鉄蔵「お、来たか。まあ座れ」
英泉「珍しいですね、先生のお呼びたてとは」
英泉「と、お栄の隣の登与助を見る。」
英泉「あんたか？カピタンにくっついて長崎から来たつてのは」
登与助「川原登与助と申します」
英泉「ふーん」
お栄「と、ジロジロと登与助を見る。」
お栄「登与さん、こっちは溪斎英泉。アタシと親父殿は善次郎って呼んでるけど」
登与助「お噂は耳にします」
英泉「噂？どうせロクなもんじゃねえだろ。意地悪顔の女の絵とかよ」
と、ちらつとお栄を見る。
知らん顔しているお栄。
登与助「いえ、美しく妖艶な絵を描かれると」
英泉「そうか？なんだ、イイ奴だな」
お栄「と、嬉しそうにどかつと腰を下ろす。」
お栄「親父殿、みんなを集めて何する気だい？」
鉄蔵「ああ。ちよいと考えたんだけどよ。アゴのお披露目をやっちゃあどうだ？」
お栄「ええ？アタシの？」
鉄蔵「そうよ。北斎の片割れは女だって、こつちから世間様にお知らせするのよ」
お栄「そんなことして親父殿はいいのかい？」
鉄蔵「構いやしねえ。どうせ、版元は知ってんだしよ。ついでに世間様にも葛飾北斎の女絵担当は、女絵師・葛飾應為だって知らせてやろうじゃねえか」
英泉「へえ、そりや面白そうだな」
登与助「ええ」
鉄蔵「お前、その代わり、もう堅気の男には相手にされねえぜ」
お栄「にやりとお栄を見る。」
鉄蔵「はなつから期待してないけどね」
鉄蔵「だったら、話は早い。お前等、手伝いな」
と、登与助と英泉を見て腰を上げる。

永樂屋「江戸中、が大騒ぎで、それはいま。私はまだ」
 菊乃「あ、北斎先生のごま、〇畳敷の大達」
 永樂屋「永私か、も俺からお願ひ致しませう」
 菊乃「どかさ、俺から頼むよ」
 英泉「御上、俺から頼むよ」
 永樂屋「もや、つて俺の『護国寺大達磨会』の仕」
 鉄蔵「先代には俺の『葛飾為のお披露目の仕」
 永樂屋「を、あ、ん、た、に、頼、め、え、か、と、思、つ、て、よ」
 鉄蔵「ア、ゴ、の、い、や、葛、飾、應、為、の、お、披、露、目、の、仕」
 永樂屋「か、た、苦、しい、の、は、ナ、シ、だ、ぜ」
 鉄蔵「皆、さん、お、揃、い、で、一、体、な、に、ご、と、で、ご」
 菊乃「お、初、目、か、り、ま、す。白、梅、亭、菊、乃」
 英泉「お、登、り、に、丁、寧、に、頭、を、下、げ、る、菊、乃」
 鉄蔵「お、白、梅、亭、菊、乃」
 菊乃「お、斎、生、白、梅、亭、来、り、た、の、か、い、ま、す」
 永樂屋「お、待、た、せ、し、て、ぶ、り、で、ご、い、ま、す」
 永樂屋（35）と菊乃が入って来る。
 中・座敷、登与助、英泉がいる。
 〇江戸の町
 〇永樂屋・外観
 人々が店頭の絵に群がっている。
 少離れ、物陰から笠を目深に被った
 清衛門が店を見張っている。
 登与助・英泉「はい！」

子供でいたが、あのよう仕切りをいつか
 やりたいと思つたものです
 お大掛かりには「金がないのでそれほ
 ど大掛かりには「お栄さんのお披露目の仕切りが出来る
 も、お栄さんの胸が一杯で：：」
 とは、もう涙ぐむ。
 鉄蔵「そうかい」
 英泉「じゃあ、やってくれんだな？」
 永樂屋「勿論でございます。御上に何と言わ
 れようと、この永樂屋は義理を通しますよ」
 鉄蔵「おう、よく言つた、偉いぞ」
 お栄「どうかよろしく願ひします」
 鉄蔵「こつちで大々的に名を広めちまえば、
 そうそう御上も手を出せまい」
 英泉「さすが先生、思いつきがデカイですね」
 登与助「で、どうするんです？」
 鉄蔵「金をかけなくても、なんか目立つこと
 をやりてえな」
 お栄「(嫌味に) じゃあ、鶏でも連れて行こう
 かね」
 鉄蔵「ああ、それがいい。あの紅葉の絵は家
 斉公の度肝を抜いてやつたもんだぜ」
 登与助「(英泉に) なんです、鶏って？」
 英泉「將軍様の御前で細長い紙にすらーっと
 川を描いて、鶏の足に絵の具をつけて歩か
 せたんだよ」
 登与助「そ、それで紅葉：：」
 お栄「と、お栄を見る登与助と英泉。
 お栄屋「：：絶対にやらないよ」
 永樂屋「ま、まあ、鶏はともかくとして、目
 立つ趣向でやることに致しましょう」
 菊乃「あ、襖に絵を描くというのは、
 いかでございましょう？」
 お栄「襖に？」
 鉄蔵「襖絵か、なかなかいい考えだな」
 永樂屋「ええ、では、大勢見物人を集めまし
 ょう」
 顔を合わせ微笑むお栄と菊乃。

○同・外・裏口
清衛門が物陰から見張っている。

清衛門「お栄達が出て来る。」

清衛門「お栄達の中に頭巾をした菊乃がいる。」

清衛門「楽しそうに笑っている菊乃。」

英泉「姉上：「？」」
一同と挨拶を交わして去って行こうと

英泉「じゃ、白梅亭、またな」
微笑して去って行く菊乃。

清衛門「見送っている一同行く菊乃。」
呆然と菊乃の背中を見つめる清衛門。

○同・店頭
清衛門がウロウロしている。

手代「旦那、何かお探しいですか？」

清衛門「あ、あ、白梅亭、菊為ね」

清衛門「と、絵の中から数枚取り出し手渡す。」

上品な美人絵の中に、着物の裾が少し

めくれ上がって女の白い足がちらりと

見えて、これがある。

清衛門「こ、これは：「？」」

手代「あ、そのあぶな絵はオススメですよ」

清衛門「：「？」」

手代「白梅亭は枕絵描いてないけど、あぶな

絵上でしよう、どうですか？」

○××寺・境内の市
英泉「やっぱり江戸の市は賑やかだな」

登与助「と、楽しそうにキョロキョロしている。」

英泉「よおー」古着屋の前で立ち止まる一同。
 店の女「おや、英泉さん、いいの入ってるよ」
 英泉「この女絵師・葛飾應為先生のお披露目
 にピッタリのどーんと派手なのを頼むぜ」
 店の女「へーえ、お披露目かい」
 店の女「おはよう！」
 英泉「顔をしかめるお栄と登与助。数枚の着物を選び英泉に手渡す店の女。
 と、赤い着物をお栄に差し出す。」
 英泉「嫌だ、じゃ、こっち」
 英泉「嫌だ、じゃ、横に振るお栄。」
 英泉「なんだよ、じゃ、これ」
 英泉「もう！自分で選ぶよ」
 登与助「苦笑して見ている登与助と店の女。」
 登与助「なかなか選べないお栄。色を着物を差し出す。」
 英泉「じゃ、ねえの？」
 登与助「主役は絵なんだからいいんだよ」
 店の女「と、着物を広げてみるお栄。下さいよ」
 お栄「と、お栄に着せか、これ」
 登与助「いいじゃないか、これ」
 店の女「少し地味だけど、いい品物だから品
 良く見えるよ。よくお似合いだ」
 お栄「これにする」
 店の女「（笑顔で）毎度あり！」
 嬉しそうな表情のお栄と登与助。
 不満そうな表情の英泉、ぶつぶつ言い
 ながら金を払う。

英泉「二人で勝手に決めやがって」
お栄「（めんどくさ）……」

登与助「すみません、俺がでしゃばったから」
英泉「そうだよ、出島野郎が」

お栄「いいじゃないか。見立ては登与さん、
よ。お金は善さん。二人の心がこもった着物だ
よ。アタシも心強いよ」

英泉「と、英泉に笑顔を向ける。」

英泉「そうかい？」

英泉「と、機嫌をよくして、
と、団子でも食って帰るか」

登与助「（お栄に）繊細そうに見えて、意外に

お栄「単純なんだね」

と、すまして後についていく。

○北斎の家・外観（夜）

○同・中（夜）

市で買った着物が掛けてある。

奥で座ったままうたた寝している鉄蔵。
お栄の枕絵を見ている登与助、ごくり

登与助「と唾を飲む。
お栄「と、そうだよ」お栄さんが？」

お栄「と、鉄蔵のそばへ行く。
お栄「と、親父殿、横になつて寝な」

鉄蔵「……」

お栄「（耳元で優しく）百まで生きられないぞ」
はつと一瞬目を覚まし、そのまま横に

登与助「なつていびきをかきはじめる鉄蔵。
お栄「と、先生、百まで生きるつもり？」

お栄「と、先生、百まで生きないと絵師として大
お栄「と、先生、百まで生きないと絵師として大

登与助「と、先生、百まで生きないと絵師として大
お栄「と、先生、百まで生きないと絵師として大

登与助「と、先生、百まで生きないと絵師として大
お栄「と、先生、百まで生きないと絵師として大

登与助「と、先生、百まで生きないと絵師として大
お栄「と、先生、百まで生きないと絵師として大

お栄「まあ、それでもいいけどね」

登与助「いいのかい？」

お栄「親父殿、ちよくちよく名前を変えちゃ

あ、人に売り飛ばしてさ」

登与助「名前を売るのかい？」

お栄「そう。売れるモンは何でもね。でも『北

齋』の名だけは大金積まれても手放さなか

ったんだ」

登与助「そうか……」

お栄「だから大事にしてやりたいとは思うよ」

寝ている鉄蔵を見つめる二人。

お栄「あー、やっぱり絵師同士は楽でいいや」

登与助「そうかい？」

お栄「堅気の男は『枕絵描いてる女』って分

かった途端、ケツまくって逃げて行くから」

登与助「——なんか、逃げられたことがある

みたいない言い方だなあ」

お栄「（苦笑して）ま、長く生きてると色々あ

るよね」

登与助の隣に寝転がって一緒に枕絵を

眺めるお栄。

その白い首筋を見つめる登与助。

登与助「……」

枕絵を見ているお栄。

着物をはだけた男女がかなり無理な体

勢で絡みあっている。

お栄「おつかしいだろ、これ。こんな、格好

できないよ」

アハハと笑って登与助を見る。

登与助「……」

お栄「登与さん？」

登与助の手がお栄の頬に触れる。

じつと見つめあう二人。

と、どちらともなく激しく抱き合い、

ゴミの隙間に倒れ込む。

× × ×

抱き合っている二人。

蠟燭の灯かりを見つめ、ふと我に返る

お栄「あ……」

お栄「あ……」

お栄「あ……」

登与助 「まだ、突っ伏して絵を描いているお栄。
と、お栄から筆を取り上げる。

登与助 「我に返るお栄。」

登与助 「火事ですってば」

お栄 「え？ ああ、逃げなきゃ……」

登与助 「描きかけの絵と道具をまとめるお栄。
裏手が真つ赤な炎に染まっている。」

登与助 「二人とも早く！」

お栄 「と、鉄蔵を抱えるようにして外へ出る。
お栄、風呂敷包みを手に出ようとして、

お栄 「あ、着物……」

登与助 「戻って、掛けてある着物を手に取る。
裏手から火が迫って来ている。」

登与助 「飛び込んで来る登与助。」

登与助 「何やっつてんだ！」
登与助に抱えられるように外へ出るお栄。

○ 同・外（夜）

登与助 「登与助を先頭に住人達がバケツリレ
ならぬ桶リレいで必死に消火している。
火の勢いがおさまっていく。
少し離れてへたり込んでいるお栄と鉄
蔵。

登与助 「登与助がくる。」

鉄蔵 「（鉄蔵に）先生、怪我ありませんか？」
鉄蔵 「ん？ ああ……：：火が点いたのはお前達
だけじゃあ、なかつたようだな」

登与助 「と、にやにやしている。」

登与助 「お、起きてたんですか？」
登与助 「バツが悪そうにお栄を見る登与助。」

路地の隅でへたり込んでいるお栄。

お栄 「暗がりの中に大黒と清衛門の姿がある。」

お栄 「お栄の視線に気づき去って行く二人。
追って行くお栄。」

○ 路地（夜）

お栄「お待ちよ！」「足早に行く大黒と清衛門。
 お栄「立ち止まる大黒達。火を点けたのかい？」
 お黒「あんた達が火を点けたのかい？」
 お栄「こんなことしたってアタシは描きたい
 大黒「んを描きますよ！」
 お栄「邪魔しないで下さいよ！アタシから絵
 大黒「を取ったら何にもないんですよ」
 大黒「振り返らずに去って行く大黒と清衛門。
 へたり込むお栄。」
 ○裏長屋・外（朝）
 一部が焼けた北斎宅。
 井戸端で煤だらけの顔をしたおみつら
 が炊き出しをして持っている。焼けたおみつら
 焼けた跡の傍らで持ち出した絵の道具を
 確認しているお栄と鉄蔵。
 陶器の入れ物の中を確かめるお栄。
 中身は鮮やかな藍色の絵の具。
 お栄「べろ藍、持ち出せたのか。さすが、親
 鉄蔵「重くて腰をやられたぜ」
 鉄蔵「と、痛そうに顔を歪める。」
 登与「登与助が二人分の雑炊を手に来る。
 登与「ど、うぞ」
 鉄蔵「とお、ありがてえ」
 登与「とお、お栄さんも」
 お栄「とうん」
 お栄「と、受け取って口をつける。
 登与「火がまわらなくてよかったですね」
 お栄「（小さい声で）これってまさか大黒の
 仕業じゃ」
 お栄「おみつら長屋の女たちが来てお栄らを
 囲む。」

おみつ「それ食べたら出て行っておくれよ」
 お栄「：：」
 登与助「ちよつと、そんな言い方ないでしょ
 う」
 長屋の女「旦那のお陰で小火で済んだから
 いけど、一歩間違ったらみんな焼け死んだ
 い」
 お栄「と、申したんだよ」
 お栄「と、丁寧に頭を下げな。」「
 おみつ「と、枕絵なんて描いてくれない
 けど、夜遅
 くまで寝ないからこういう
 ことになるんじゃない」
 お栄「：：」
 登与助「火は長屋の裏手にあがってたんだ。
 先生方の火の始末じゃありませんよ」
 おみつ「言ったらかい？誰かが火を点けた
 とも言うの？」「
 登与助「それは調べれば――」
 お栄「（遮って）アタシの不始末です。すみま
 せん」
 登与助「お栄さん！」
 鉄蔵「じゃ、行くかな。どっこいしょ」
 登与助「と、雑炊の器を置き、立ちあがる。
 淡々と荷物をまとめる鉄蔵とお栄。
 鉄蔵「じゃ、世話になつたな。大家にはあと
 で届けると伝えてくれ」
 おみつ「え、あ、あ、あ」
 お栄「と、世話になりました」
 鉄蔵「と、丁寧に頭を下げる。」
 登与助「あ、はい」
 荷物を背負って長屋を出て行く三人。
 黙って見送る長屋の住人達。

○路地（朝）
 登与助「疲れた足取りです。歩いて行くお栄達。
 お栄さんも北斎先

生も悪くないのに「
 お栄屋の巻き込めないだろ」
 登与「それか？」
 お栄「はい、やめとくよ」
 鉄蔵「登与、助や蘭人を巻き込めねえよな」
 登与「あ、ここに、こちとら家移りは得意技だ」
 お栄「そうそう」
 登与「登与助に笑顔を向ける。」
 ○古い小屋・外
 町はずれの小さなボロボロの小屋。
 外に莫菴を敷き横になつて耳をほじつ
 ている鉄蔵。
 風呂敷包みを抱えた菊乃が来る。
 鉄蔵「お、白梅亭じゃねえか」
 菊乃「遭わされた、お聞きしましたよ。大変な
 菊蔵「お見舞いをお持ちしました。お口に合
 いませうか？」
 風呂敷包みを開けると重箱にたくさん
 のぼた餅が並んでいる。
 鉄蔵「お、さっ、それ、はこれ、は」
 鉄蔵「こりや、美味いわ」
 菊乃「微笑んで、鉄蔵を見つめる菊乃。」
 菊乃「アゴ？先生のピンピンしてるよ」
 鉄蔵「ま、い落ちさ、れ、お、い、の、で、は、早、く、お
 菊乃「ここもなかなか悪くないぞ」
 鉄蔵「と、周囲を見まわす。」
 鉄蔵「——実にはよ、あつちの壊れたお堂がい
 い逢引きどころになつてよ」
 と、にやりと菊乃を見る。

永樂屋「いらっしやいました」
大黒「（小声で）葛飾應為の披露会を仕切っているのはお主か？」

永樂屋「（怪訝）何です、一体？」

永樂屋「手を引け」
ちは北齋先生と長いつきあいなんですよ。こつ

大黒「その北齋の長屋から、火が出たのを知らぬのか？」

永樂屋「えっ！あ、あんた、まさか……」

大黒「この店もよく火が回りそうだ」

永樂屋「冷たく微笑んでみせる大黒。」

○晴れ渡った空

○道

登与助「敷包みを選んだ着物を着たお栄と風呂敷包みでよかつたですね」

お栄「うん。せつかく逃えた着物だしね」

お栄「そ、そうかい？」

お栄「と、照れ臭そうに微笑む。」

お栄「曲がり角の手前に来る二人。」
登与助「あ、そこを曲がったとこだよ」

○××寺・外観

立派な門構えの大きな寺。
人気は全くない。

○同・外・表門

登与助「立ち尽くしているお栄と登与助。」

登与助「誰もいねえってのはどういうことだ？」
門をくぐり足を止める二人。

登与助「境内にも誰もいない。お栄「ほんとうにこの寺ですかい？」

登与助「と、はつとなる登与助。門の脇に「葛飾應為御披露目之会」の大きな看板が壊されうち棄てられてい

る。登与助「どういふことだ……」

清衛門「清衛門と侍が二人やって来る。

お栄「溜息）そういふことか……」

清衛門「お待ちしておりました。ここからは應為様お一人で」

登与助「登与助の前に立ちはだかる侍二人。

登与助「お栄を促がす清衛門。登与助「お栄さん、帰りましょう」

登与助「お栄の背から風呂敷包みを下ろすお

登与助「お栄さん……」

お栄「大丈夫だよ」

と、登与助に笑顔を向け清衛門について行く。不安気に見送る登与助をしめ出すように門が閉じられる。

○同・座敷

大黒と数人の家臣がいる。

清衛門「葛飾應為殿がお見えになりました」

大黒「さうか。あまりの盛況ぶりに驚いてお

清衛門「ハハハと笑う大黒と家臣達。清衛門「ハハハと笑う大黒と家臣達。広間で

大黒「太いおなごだ。泣いて帰れば、まだ

清衛門「少しを」

清衛門「大黒に少し気毒でございませぬ」

大黒「手始めに北斎の娘を潰せば、他の女絵
清衛門「分をわきまえるだらう」

意地の悪い笑みを浮かべる大黒を不安
そうに見る清衛門。

○同・中・大広間
誰もいない広間の中央にポツンと座つ

ているお栄。広間の中央にポツンと座つ
脇には絵道具が並べられている。

お栄「脇には絵道具が並べられている。
紐を取り出し襷がけをして立ち上がる。

○同・外
寺の外堀によじのぼっている登与助。

寺の外堀によじのぼっている登与助。
乗り越えようとしたところ、侍二人
に見つかり外側に追い落とされる。

○同・中・座敷
大黒と清衛門がいる。

大黒「風呂敷包みを負ったお栄が来る。
お栄「仕事が終わったので帰ります」

大黒「仕事が終わったので帰ります」
お栄「と、清衛門と顔を見合わせる。

お栄「はい」
お黒「女の仕事に興味などないわ」

お黒「女の仕事に興味などないわ」
お栄「男と違って下さいよ。化粧もしませんし、

お栄「男と違って下さいよ。化粧もしませんし、
ナリもこんなですしね」

大黒「どんな格好をしていますか、女は
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
大黒「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ
お栄「溜息」女、女と、何か女に恨みでもあ

お栄「……」
大黒「女が男と肩を並べようというのは、所詮無理なことなのだ」

お栄「大黒様の奥さまは大変でございますね」
大黒「なんだと」

お栄「私とは違い心の広い随分とできたお方なのでございましょう。そうでなければ」

大黒「(遮って)妻のことは関係ない！」
じつと大黒を見つめるお栄。

大黒「さつさと帰れ！その顔、もう見たくないわ！」

部屋を出て行く大黒。追う清衛門。深い溜息をつくお栄。

○同・中・大広間

途惑いながら襖を囲んでいる家臣達。

大黒と清衛門が来る。

さあつと襖から離れる一同。

大黒「何ごとだ？」

全員、気まずそうに口を閉ざしている。

大黒「あの娘……」
白い襖の一枚にでかかど『大黒の顔をした鬼が数人の女を踏みつけにしている。』が墨一色で描かれている。

大黒「あの娘……」
と、襖を睨みつける。

大黒「二度と絵筆を持ってないようにしてくれ」
刀を抜き襖の鬼を袈裟懸けに斬る大黒。

と、冷たい目で壊れた襖を見つめる。

○同・外

とぼとぼとお栄が出て来る。

登与助「門の脇に登与助がいる。」
情けない笑顔を見せるお栄。

お栄「うん……」
登与助「元気に……」

お栄「別に、落ち込んでないよ」
お栄「お栄を見つめる登与助。」

お栄「……ちよつとだけね」

登与助「ほら、やっぱり」

風呂敷包みを代わりに背負い、お栄の

手を取る登与助。

照れ臭そうに微笑むお栄。

お栄「せつかく、登与さんが見立ててくれた

着物のに、お披露目出来なくて残念だな」

登与助「照れ臭そうに微笑む登与助。」

お栄「登与さん？」

登与助「今日は弟子のお披露目なんで、宿に

登与助「お栄と登与助が、布団の上で抱き合っ

ていないだみたいなのは、御免ですよ」

○女 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

○同 間口も狭く古びた建物。

り払う。

重四郎「なんか、酷いめにあったみたいでさ」

英泉「そうらしいな」

重四郎「慰めんのは、あなたの役目じゃねえよ」

英泉「あの出島野郎か」

面白くなさそうに出て行こうとする。

重四郎「お雪のところに寄ってやって下さいよ」

英泉「……今日は気乗りがしねえな」

「じゃ」と、出て行きかける。

重四郎「あんた、叔母ちゃんの何なんです？」

思わず立ち止まる英泉、少し考えて。

英泉「……さあ、何なんだろうな」

と、ふっと笑って去って行く。

重四郎、複雑な表情で英泉の背中を見つめる。

奥の部屋からお雪（19）が出て来る。

お雪「重さん、今、英泉さんの声でした？」

重四郎「そう……いや、今日は来てねえよ」

と、気落ちして部屋に下がる。

深い溜息をつく重四郎。

○同・中・小部屋（夜）

登与助「……寄り添い横になっっているお栄と登与助。

お栄「いつ？」

登与助「明後日の朝」

お栄「そうかい……」

登与助「こないな時に、お栄さんを残して帰り

お栄「お役目んだが」

お栄「お役目なんだが、仕方ないよ」

登与助「長崎に来る気はないかい？」

お栄「え？」

登与助「長崎の役人は、江戸の奉行よりは石

お栄「そやないと思う」

登与助「そうかな。でも、親父殿がいるしね」

お栄「……そうだな」

お栄「……一緒に行くって言いかねないな」

お栄「……」

お栄「……」

登与助「大黒がまた何かやりそうで心配だよ」
お栄「登与さん……」
登与助「こないだのカピタンの巻き物も、ば
れたらコトだ」
お栄「……その気になれば、いくらでも叩け
るね、アタシ」
登与助「ああ」
苦笑し合う二人。

○大黒の屋敷・外観（夜）

○同・中・廊下（夜）

灯りを手に寝間着の大黒が来る。
書齋から灯りがもれている。
表情を曇らせる大黒。

○同・中・書齋（夜）

大黒久枝（45）が文机を前に考えこん
でいる。

久枝の周りにはクシヤクシヤに丸めら
れた紙が散らばっている。

大黒の声「久枝、入るぞ」
久枝「……」

障子が少し開き、大黒が顔を覗かせる。
久枝「（ちらと見て）どうかなさいましたか？」

大黒「まだ、起きていたのか」
久枝「ええ。大事な歌会があるのです」

大黒「歌会もいいが、ほどほどにしなさい」
久枝「次こそは市岡殿に負けられないのです」

険しい表情になる大黒。
大黒「おなごが男に勝ってなんになる」

久枝「また、そのようなことを」
と、呆れた表情で大黒を一瞥する。

大黒「……」
久枝「あなたは大黒家の婿として、ただお役

目を全うしてくださればよいのです。私の
やることに口出しなさいますよう」

大黒「……」
久枝「閉めて頂けますか？気が散ります」

大黒「あゝ、ああ……」
障子を閉める大黒。
深い溜息をつく久枝。

○女郎屋・中・小部屋（夜）

軽く寝息をたて眠っている登与助を傍らで見つめているお栄。
床から這い出し襦袢を羽織ると風呂敷包みから絵の道具を取り出す。
お栄「（ぽつりと）次はいっつ会えるだろうね」と、登与助の寝顔を描き始める。

○門倉家・外観（夜）

大黒の屋敷に比べるとだいぶこじんまりとした質素な家。

○同・中・菊乃の部屋（夜）

清衛門の文机に向い美人絵を描いている菊乃。どきりととなる菊乃、描きかけの絵を柵に隠す。

菊乃「清衛門、何か？」

清衛門「何を机の上にと広げろ。障りのない梅の絵と、戸を開ける。よろしいですか？」

菊乃「こんな夜更けに、何用です？」

清衛門「広げられた梅の絵を見る清衛門。おいらは私に何か隠しておいでではございませんか？」

清衛門「先日、永楽屋という店たなで姉上をお見

菊乃「かきました」

清衛門「葛飾應為とはどのような関わりなの

菊乃「す？」

清衛門「なぜそれを？」

清衛門「ですか？」
 清衛門「はい。」
 菊乃「まさか、お住まいに火を点けたのはお前ではないでしょうか？」
 清衛門「姉上、まず私の質問にお答え下さい。」
 菊乃「菊乃を押し退け、柵を開ける清衛門。」
 柵から紙束を取り出す清衛門。
 色鮮やかな美人絵やあぶな絵、下書きの絵などがばらばらと床に落ちる。
 清衛門「これは一体なんなのですか？」
 一枚の美人絵を拾い上げる清衛門。
 清衛門「白梅亭菊為とは……」
 清衛門「白梅亭菊為と……」
 菊乃「——私です。」
 清衛門「（やっぱり）……」
 散らばった絵を拾い上げる清衛門。
 清衛門「まさか、枕絵などは描いておりませんでしような？」
 「描いていない」と首を振る菊乃。
 「ほつとする清衛門。」
 清衛門「もし、枕絵など描いておられたら、私には姉上を手打ちにするところでした。」
 清衛門「！」
 清衛門「浮世絵師が出たなど、お家の恥でございませ。」
 菊乃「恥……子も産めず出戻ただけでも恥だ、というのに……」
 と、情けなく微笑む。
 菊乃「絵や道具を抱えて出て行く清衛門。」
 と、慌てて後を追う。
 ○同・外・庭（夜）
 清衛門「絵と道具を庭に放る清衛門。」
 菊乃「この事は私一人の胸にしまっておきます。」
 清衛門「清衛門」
 清衛門「ですから、錦絵や葛飾應為のことは、

喜代「何ごとでございます？」

清衛門「菊乃の両手が赤く腫れ上がっている。」

喜代「あ、姉上、手が……」

清衛門「絵が燃えて家の中に戻って行く。」

許衛門「姉上、大黒様は女の絵師を決してお

清衛門「私がお勤めにあるのも大黒様の

菊乃「家はどうかですか。もし、正体が知れたら

清衛門「大黒様は恐い御方です。今日も葛飾

菊乃「なんてことを……。先生、お気の毒に」

喜代「姉上、大事ありませんか？」

喜代「水につける。菊乃の手を

清衛門「（儀助に）悪いが片付けを」

儀助「へえ……」

清衛門「姉上、どうか頭をお冷やし下さい」

と、家の中へ入って行く清衛門。菊乃。黙って清衛門の背中を見つめる菊乃。

○女郎屋・外（早朝）

登与助「お栄と登与助が出て来る。」

お栄「（ぼつりと）あっさりしてるね」

お栄「（ぼつりと）登与助がくるりと向きを変え戻つて来る。」

お栄「なんだい、忘れもんかい？」

登与助「ああ、お栄に軽く口づけをする。」

○門倉家・中・座敷（夜）

線香の煙がたちこめる中、菊乃が布団の上で寝かされている。側で泣いている喜代と娘の千代（5）。俯いて拳を握り締めている清衛門。庭から儀助が来る。

儀助「旦那様、葛飾應為様をお連れしました」
儀助の後から文を手に息を切らしたお栄が来る。

清衛門「どうぞ、中に」
お栄を迎えに立ち上がる清衛門。
お栄「あっ、あなたが清衛門……？」
無言で頭を下げる清衛門。

清衛門に驚きながら、中を覗くお栄。
菊乃の変わり果てた姿。

お栄「なんで……なんでこんなことに？」
下駄を脱ぐのもどかしく座敷に上がり、菊乃の傍らに寄りかかると、顔の白布を丁寧にめくる。

お栄「死化粧をした菊乃の穏やかで美しい顔と、側で泣いている喜代を見る。」

喜代「む、胸を一突き……自害されたのです」
お栄「（絶句）」
わあっと泣き出す喜代、つられて激しく泣き出す千代。

お栄「（清衛門に）何があった？」
清衛門「私が白梅亭菊乃とやらの絵を燃やしました」

お栄「！」
清衛門「その絵師と姉上とは何の関わりもございませぬ」

お栄「……」
耐えきれず姿勢を崩さぬまま激しく泣き出す清衛門。

清衛門「あんたが、あんたが姉上をそそのかしたから……」

清衛門「何故、錦絵ごときのお栄……」
私にはあなたを決して許しませぬ

と、お栄を見据える。
菊乃に手を合わせ出て行くお栄。

○満月が出ている空

○江戸の町（朝）

疲れた様子でのろのろ歩いて来るお栄。
大勢の人達とすれ違う。
皆、興奮気味で楽しそうにしている。

お栄「何言ってるのよ、なにござい？」
男「行列見物だよ」
カピタンの

お栄「あっ！」
と、慌てて駆け出す。

男「笑って（もうとっくに）行っちゃまったよ！」
構わずに走って行くお栄。

○町のはずれ

小高い丘から街道を見下ろすお栄。
肩で息をしながらあちこちを見回す。

お栄「あーあ……」
と、へたり込み息を整える。

目の前に小さな野菊が咲いている。
じつと見つめるお栄、堰を切ったよう
に泣き出す。
身体を丸め大声をあげ泣き続ける。

○古びた一軒家・外観

町外れの小さなあばら家。

T・数ヶ月後。

○同・中

広げた紙を前にぼうつと呆けているお栄。
筆を取るがうまく動かせず、真っ白
紙に黒い染みが広がっていく。

お栄「あーあ……」
と、深い溜息をつく。

奥で枕絵の版下を描いている鉄蔵。

んだな
お栄「と、いやらしく微笑んでみせる。
不安そうに読売を見つめる。」

○長崎・出島・俯瞰

○牢の中
数人の男達が囚われている。
皆、痛めつけられ身体中傷だらけ。
馬場「その中に登与助と馬場もいる。」

馬場「やっつけない罪まで被るなんて、登与さ

男「元の大馬鹿野郎だな」

登与助「師匠と：：弟子を守る為なら、こん

なのどうってことないよ」

馬場「カツコつけちゃって、見てらんねえよ」

登与助「あの絵を俺が描いたってことになる

馬場「ですよ。却ってトクした気分だ」

登与助「ぼつりと」でも、利き手をやられた

のは、ちよつとね：：「と、右手を少し動かしてみるのが痛みで
顔を歪める。」

○神社・本堂前
じつと手を合わせているお栄。

○同・境内
数人の子供達が走り回っている。

手にした小枝を弄びながら、子供達を

ぼんやりと見ているお栄。描いている。

無意識に小枝で地面に絵を描いている。

鳥や花、へんな顔の男などを子供達が
来て覗き込む。
女の子「おばちゃん、うまい」

女の子「うまい」

○道

お栄が歩いて来る。
少し距離をあけ、笠を目深に被った男
が二人ついて来る。
男は大黒と清衛門である。
大黒「しくじるな」
清衛門「お栄を追って行く清衛門。」

○人氣

の道お栄、追ってくる氣配に氣
歩いて来るお栄、追ってくる氣配に氣
づき早足になる。
お栄「なに？」
お栄「振り返ると清衛門が刀を抜いて追って
来る。」

お栄「ぎゃあ」

下駄を脱ぎ捨て全力で逃げるが追いつ
か、れ、袋小路に追いつめられる。
お栄「あ、あんたは……」

清衛門「斬りかかるとフリをしてお栄に
耳打ちする。」

お栄

「もう一度、斬りつける清衛門。」

右手を押しえ、駆け出すお栄。
お栄を見送り、刀を鞘におさめる清衛門。
大黒が駆け寄って来る。

大黒「やったか」

清衛門「はい……」
と、お栄の去った方をちらりと見る。
大黒「これで少しは懲りるであらう」

清衛門「もうしばらく見張れ」

大黒「はっ」
去って行く大黒を見送る清衛門。

○林道

清衛門「清衛門が来る。」

清衛門「（抑え目に）應為殿」
木の陰から出て来るお栄。
清衛門「大事ありませんか？」

鉄蔵「しばらくしたら、遊びに行つてやるか
取りあはず俺は、描く物がいっぱいあるか
らよ」
筆を取る鉄蔵を恨めしく見るお栄。

○江戸の町（夜）

○女郎屋・中・お雪の部屋（夜）

英泉「背中を向けたまま不機嫌なお雪。」

お雪「待たせたな」

英泉「なんだ、機嫌直せよ」
お雪「あの女のとこに行つてたのかい？」

英泉「あの女？」
お雪「重さんの叔母さんて人だよ」

お雪「いつもいつも、英泉さんの絵に出て来
る女はあの女なんだろ」

英泉「だつたら、なんだつてんだ？」
お雪「英泉に向き直るお雪。」

お雪「あんなのオバさんじゃないか。どこが
いいんだ、あんな女？」

英泉「ふつと笑う英泉。」
お雪「お雪。」

英泉「だつたら俺もただのおっさんだな。若
え情夫にのりかえな」

お雪「部屋を出て行くとする英泉。」

お雪「待ちなよ」

七首あいくちを自分の首筋にあてているお雪。

英泉「英泉、うんざりといった表情で、
お雪「出て行ったら死ぬよ」

英泉「更さらに七首を押し当てる。」

英泉「死ぬ気もねえ奴が死ぬ死ぬ言うんじゃ
ねえ！」

お雪「部屋を出ようとする英泉。」
お雪「本気だよ！」

振り返った英泉の顔が血飛沫に染まる。

○北斎の家・中（朝）

荷物をまとめているお栄。ゴミの間でうたた寝している鉄蔵。と、戸口が乱暴に開けられる重四郎が入

お栄「飛び起きる鉄蔵。飛ばさないと、飛ぶ起きる鉄蔵。飛ばさないと、飛ぶ起きる鉄蔵。

鉄蔵「金ならねえぞ！」

重四郎「お雪が、英泉の前で自害した」

○道（朝）

重四郎の後に、駆けて行くお栄。

○女郎屋・外観（朝）

○同・中・廊下（朝）

お雪の部屋の前、数人の女郎が襖の間から中を覗いて、皆、顔を強張らせて動かない様子。

重四郎と道を開ける重四郎達。

○同・お雪の部屋・中（朝）

お雪の部屋に、血に染まった白顔、見開いた眼が天

井を睨みつけた。英泉が狂った

よらで血飛沫に染まった。英泉が狂った

重四郎「俺が見つけた時から、ずーっとこん

鉄蔵「深い溜息をつく鉄蔵。と、苦笑する。欲がねえなあ」

お栄「親父殿、せいぜい長生きしろよ。親父殿が生きてるうちはアタシも影でいられるからね」
鉄蔵「そうだな」
と、微笑みあう二人。

○北斎の家・中
ゴミの隙間にじっと座っているお栄。目の前には真っ白い紙と絵道具が置かれてる。紙をじっと見つめるお栄。大きく息を吸うと筆を取り描き始める。

○長崎の町・俯瞰

○登与助の部屋・中
傷だらけの登与助が紙に向っている。筆を取ろうとするが右手が上手く動かない。
登与助「負けんじゃねえぞ、お栄」
と、必死で筆を掴み取り絵を描きだす。

○北斎の家・中
お栄の「一心不乱に筆を動かすお栄。流れる汗を気にもとめず描き続ける。」

○蔦屋の店・外観

○同・中・廊下
丁稚「(氣遣って)大黒様がお見えになっすよ」
お栄「(毅然と)アタシは構わないよ」

○同・中・座敷
大黒、蔦屋の前に仕上がった数枚の絵

